

100周年記念事業としての学園史編さん

浜田 弘明

1 はじめに

桜美林学園の創立者・清水安三が、中国・北京に崇貞学園を創立してから今年（2021年）でちょうど100年を迎える。本学園の創立100周年を記念して、2018年から「学園史編さん事業」がスタートした。

手元の資料¹によれば、本学園において、100周年記念事業の検討が始まったのは2015年のことで、4月9日の常務理事会において「学園100周年事業」について話し合われている。その後9月3日の常務理事会において、「100周年事業室」並びに「学園史編纂室」の設置について承認され、学園史編さんの準備を開始することとなった。そして2017年5月11日の常務理事会において、「学園創立100周年実行委員会」の立ち上げについて検討される中で、「学園百年史の刊行」について承認され、具体的に検討を進めることとなった。

「学園創立100周年実行委員会」は、佐藤理事長・学園長（当時）を委員長、名取常務理事を副委員長、学園本部長・各事務部門部長等を委員として、2017年5月17日に第1回実行委員会が開催された。学園史編さんが100周年事業に組み入れられたことから、学園史編さんについて提案し続けてきた筆者も、唯一教員の立場で実行委員会のメンバーに参画することとなった。6月14日に開催された第3回実行委員会では、22日に開催を控えた常務理事会への報告資料が検討され、「学園史編さん計画書」についても提出されることとなった。7月5日に開催された第4回実行委員会では、数度にわたる検討の結果として、記念式典の開催、募金活動の実施、100周年史の編さんを3本柱とすることが決められた。9月13日に開催された第6回実行委員会では、筆者からより具体的な学園史編さん計画を提案させていただき、提案は、その後に開催された常務理事会において検討され、第1巻は100周年式典当日に配付できるようにすることとなった。12月20日開催の第8回実行委員会においては、2018年度予算に学園史編さん事業を盛り込むため、翌21日に開催される常務理事会において筆者が直接、編さんの具体的内容について説明することが要請され、説明を行った²。

このような経過を経て、2018年度予算として「学園史編さん事業」が認められ、本格的に事業着手することとなった。本稿では、まず学園史編さんに至るまでの前史として、学園の年史編さんへのアプローチと清水安三記念プロジェクトの活動並びに、博物館学芸員課程の長年にわたる資料収集・調査と展示・教育活動の取り組みを振り返り、その後、学園史編さん事業の3年間の取り組みについて振り返ることとしたい。

2 学園史資料の収集と整理

(1) 学園編さんへのアプローチ

本学園では、今回の編さん事業以前には、『学園史』という形の大がかりな編さん事業は行われてこなかった。しかし単発的には、これまでに何点かの記念誌類が作成されており、今回の編さん事業の基礎資料となっている。学部・学科や部活動ごとなどの記念誌類も多数確認しているが、ここでは、学園全体としてまとめられたもの限定して振り返ってみることとしたい。

本学園定番のものとしては、1977年に刊行されたB6判454ページに及ぶ『石ころの生涯』があるが、学園創立者・清水安三の回顧録的記録内容の図書である。また、写真集が1979年から2007年までに、いずれもB4変形判のもの4点が刊行されているほか、1986～1994年には、A5判60～90ページの『桜美林学園 創立40周年記念誌史料集』が7冊刊行されている。この『記念誌史料集』は、1992年に刊行された第6号(88ページ)と1994年に刊行された第7号(60ページ)を『桜美林学園 創立45周年記念誌史料集』として刊行している。

最初の写真集は、1979年刊行の『写真で見る桜美林学園史 33年のあゆみ』(48ページ、写真1)である。

当時の学園長・清水畏三氏が書いた本書の「あとがき」には、「桜美林学園が30周年を迎えた際、学園建設に貢献された方々への感謝をこめて、学園史もしくは記念写真集を編集すべきではないか、という学園長としての責任を感じた。以来4年、ようやくこの『写真で見る桜美林学園史 33年のあゆみ』を出版し得て、いささか肩の荷を軽くすることができた思いである。」との記述があり、学園創立30周年を記念して出版されたものであることがわかる。また、48ページの写真集ながら、刊行までに4年の歳月を費やしたことが記されている。

創立者・清水安三が昇天した1988年には、1979年版の写真集に資料を追加する形で、『写真で見る桜美林学園史 42年のあゆみ』(68ページ)を刊行している。本書の「あとがき」では、当時の学園長・清水畏三氏が、「この写真集は、昭和63年1月17日に昇天された清水安三先生を記念して作成したものである。42年間の“創立者の時代”をしのぶよすがにもなれば、編集者として誠に幸いである。」と記している。

前後するが、町田キャンパス創立40周年となる1986年には、『桜美林学園 創立40周年記念誌史料集』第1号(56ページ、写真2)が作成されている。本書の「『あとがき』にかえて」の中で、当時の学園長・清水畏三氏は、「同窓会より四十周年記念の学園史をつくってもらいたい、との要望がでてきた」とし、「そろそろ学園史を出版してもよいかもしれない」と記している。しかしながら、続いて「とはいえ、事実に基づく歴史だから、そう簡単につくれるものではない。今から着手しても、出版まで相当な時日をようするだろう」と編さん事業の困難さについて触れている。この時、清水畏三氏を委員長とする「『桜美林学園創立四十周年記念誌』史料編集委員会」が組織されていて、委員は幼稚園・中学から各1名、高校から5名、短大から2名、大学から7名、図書館から1名の計18名で構成し、事務局は広報室に置かれている。

その後、未公開ではあるが、短期大学が閉校することとなった2006年に、当時の短大学長の岡村登志夫氏が『桜美林短期大学・桜美林大学短期大学部56年のあゆみ』(A4判、132ページ)をまとめている。岡村氏による「はじ

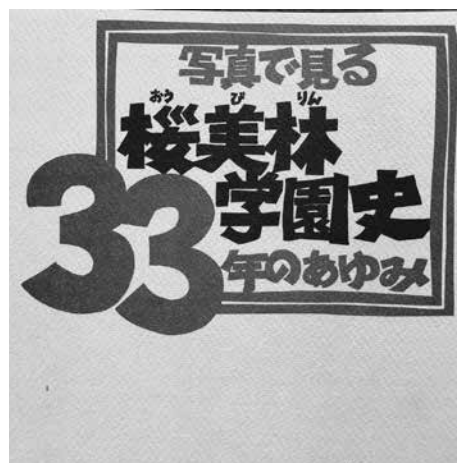


写真1



写真2

めに」を見ると、2005年3月に「桜美林学園60周年記念事業準備委員会」が開かれ、「『記念出版』として『60周年写真集』とすると決まった」とある。続いて、「詳細な『沿革史』を作成するには時間的に間に合わないという理由による」とし、「詳細な『沿革史』は70周年なり、80周年なりに先延ばしされることとなった」と記している。その後、刊行されたのが、2006年の『1946-2006 60周年記念写真集』（16ページ）ということになる。本書の「ごあいさつ」の中で、当時の理事長・学長の佐藤東洋士氏は、「学園は60周年を迎えますが、前身である中国・北京にあった崇貞学園から数えると、85年の節目にあたります」と述べている。その後の創立年の変更を踏まえ、翌2007年に、崇貞学園の歴史を含めた『桜美林1921-2007 Photograph Collection』（26ページ）が刊行された。

また2006年の60周年の際には、後述する「清水安三記念プロジェクト」が、記念展示用パンフレットとして『資料に見る桜美林学園の60年 写真展「桜美林の記憶」』（B5判、24ページ）を刊行するとともに、翌2007年に『崇貞・桜美林の教育』（A5判、230ページ）を刊行している。

(2) 学園史資料の収集と整理

今回の編さん事業に直接つながる、学園史資料の収集・整理と調査・研究が始まったのは、1997年に遡る。これらの作業は、これまで「清水安三記念プロジェクト」（以下「安三プロジェクト」）と博物館学芸員課程において細々と続けられてきた。安三プロジェクトの発足経緯については、『崇貞・桜美林の教育』³の「あとがき」に樽松かほる氏が記しているが、ここではそれをもとに改めて紹介しておくこととしたい⁴。

筆者が桜美林大学に着任する4年半前の1997年9月、安三プロジェクトの前身となる「安三・郁子研究会」（通称「安三研」）が学内の教員有志により発足した。研究会は、その名の通り学園創立者である清水安三・郁子夫妻の研究や桜美林学園史の研究を目的とするものであった。その半年後、研究会メンバーであった桜美林高校教諭（当時）の清水賢一氏が保管されていた、段ボール箱120箱にのぼる学園史関係資料の整理を目的として、大学の予算支援の下、安三プロジェクトが正式にスタートした。

当初は、忠生第二ゼミハウス（現・忠生教室棟）2階の3室が資料室に充てられ、2000年から本格的に資料整理が開始された。当時、本学国際学部教授の高橋順一氏（故人）の指導の下、本学大学院（博士課程）生であった石渡尊子氏（現・本学健康福祉学群教授）が史資料、本学学部生であった岩本貴永氏（現・本学国際理解教育支援プロジェクト・コーディネーター）が写真の整理に当たった。余談となるが石渡尊子氏には、資料整理の訓練を兼ねて、高橋順一氏の紹介で2001年当時、筆者の勤務先であった相模原市史編さん室で半年間、紙資料を中心とする資料整理に携わっていただいた。

ちょうどその時期、桜美林大学で博物館学担当専任教員の公募があり、たまたま応募していた筆者が採用されることとなり、2002年4月に本学着任後、必然的に安三プロジェクトに参画することとなった。さっそく、翌2003年にプロジェクトとして資料の燻蒸予算を計上し、夏休みを利用して初の資料の全面燻蒸を行い、ようやく虫害・カビ対策を施すことが出来た。さらに同年春、新たに其中館3階に博物館実習室2室と学芸員課程事務室等が整備されるのを機会に、学園史資料の整理を学生の学芸員教育にも活かそうと考え、資料整理を長年担当されてきた石渡氏に、学芸員課程の非常勤講師をお願いし、「学園史コレクションの整理と保存」の博物館実習プログラムがスタートした。また、学芸員課程においてもこの実習に合わせ、資料保存のための中性紙の保存封筒・保存箱、桐箱、ナフタリンペーパーなど用意し、より良い資料の保存環境の実現に努めた。石渡氏の努力により、資料目録はデータベース化され、この段階

で約6,000件にのぼる仮目録が完成した。

2005年春には、総合文化学群の発足に伴い、忠生第二ゼミハウスが忠生教室棟として改修されるのに合わせ、学園史資料室は博物館実習室のある其中館に移転することとなり、2階に資料保管室2室（写真3）と資料整理室1室、3階に写真整理室1室を確保するに至った。さらに、幸いにも同年に、写真整理に当たってきた岩本氏（学芸員有資格者）が本学の国際理解教育支援プロジェクト職員として、翌2006年春には、資料整理に当たってきた石渡氏が本学専任講師として採用された。加



写真3

えて、学芸員課程に実習補佐職員として本学卒業生で学芸員有資格者の平崎玲菜氏が新規に配置されることとなり、資料整理に一層の弾みがついた。その後、2017年度まで12年間にわたり、石渡氏の実習と並行して、平崎氏の指導の下、学芸員課程で学ぶ学生学芸員（アルバイト）を雇用し、資料整理と本目録化作業を進め、約36,000点の資料が整理された。もちろん、その間に学園各部署や卒業生からの新規の資料寄贈も増え、資料の充実が図られていった。

(3) 学園史資料の公開と展示

2006年5月には、桜美林学園創立60周年を記念し⁵、これまでに整理された学園史資料と写真資料をもとに、太平館1階ギャラリーを利用して、初の学園史資料・写真展示「桜美林学園創立60周年記念展」（以下、「記念展」）を開催した。この展示の準備作業から撤収作業に至る作業は、博物館実習学内プログラム「みんなでつくる60周年記念展」として実施した⁶。展示までには、約1か月かかったが、学生たちは、この作業を通じて桜美林の歴史を学び、学園の記念事業に自らが参加しているという実感を持てたことは大きな成果であった⁷。この「記念展」には、10日ほどの短い会期であったにもかかわらず、入場者は870名を数え、多くの学生・教職員・卒業生から常設の展示室を是非設けて欲しいとの要望が寄せられた。

2007年度には、学芸員課程において実践してきた「少人数教育による実践的対応型学芸員養成」をテーマとした教育的取組みについて、学内「特色GP」第1位に採択されたのを受け、文部科学省「特色GP」及び日本私立学校振興・共済事業団「教育・学習方法等改善支援経費特別補助」に申請した。その結果、後者事業団補助事業に採択され、実習充実のための展示室整備への現実性が帯びてきた。これをきっかけとして、同年秋から学園事務局に対し、博物館実習の場を兼ねた展示室の確保に関する要望を重ね、その結果、2008年春学期にようやく、すでに資料室が設置されている其中館2階の入口すぐ脇に80m²程のスペース（旧チャプレン室）を確保するに至った。同年9月から改修工事に着手し、11月中旬には展示ケース等の設置を終えた。その後、資料の列品作業は、博物館実習学内プログラム「資料展示の実務」として行い、まさに「学生とともに作り上げる展示」を実現して、「桜美林資料展示室」（以下「展示室」）として、12月1日にオープンするに至った。このように、間接・直接にせよ、博物館実習において『学園史』や「学園博物館」の準備を学生自らが手がけてきたという点は、他大学では例を見ない実務と言え、愛校精神を養う上でも重要な教育プログラムとなった。

展示室の開室当初は、60周年で開催した「記念展」の展示をベースに構成し、プロローグとして「Ⅰ 学園の歴史資料」、展示展開として「Ⅱ 学園創立者 清水安三先生と郁子先生」「Ⅲ

崇貞学園と初期の桜美林学園」「Ⅳ 拡充期の桜美林学園」「Ⅴ 桜美林高校の甲子園出場」の4テーマ、そしてエピローグに「Ⅵ 新校舎建設が進む桜美林学園」と計6つのテーマを設けた。原則として、「もの」資料はケース展示とし、解説文・写真資料・ポスター類は額装し壁面展示している。展示テーマと展示資料は、少しずつ変えながら今日に至っている。現在の展示テーマは、「Ⅴ 部活動で飛躍する桜美林」「Ⅵ 生まれ変わる桜美林学園」と変わっている（写真4）。



写真4

この展示室は、博物館学芸員課程に在籍する学生を「学生学芸員」としてアルバイト雇用し、運営されている。2009年度からは、桜美林高校や、リベラルアーツ学群1年生に実施されている初年次教育「リベラルアーツセミナー」でも自校教育の場として利用され、近年は年間を通して30～40クラスが見学に訪れている。展示案内は、学生学芸員によって行われているため、先輩から後輩に学園の歴史を伝える場ともなっている。

3 学園史編さん室の設置と業務

(1) 編さん室の設置

「はじめに」でも触れたが、2017年5月17日、学園内に「学園創立100周年実行委員会」が立ち上げられ、式典開催・募金活動・学園史編さんを柱とする記念事業の実施が決定された。同年12月の2018年度予算要求において、総務部予算として学園史編さんに関わる事業費を計上、翌年3月に学園史編さんのための予算が確定し、学園史編さん室の設置が決定した。



写真5

人員確保が最重要と考え、予算要求に当たっては、事務局で学内や卒業生からの資料の寄贈や寄託の呼びかけと収集、日常的な資料の整理や調査を行う必要があるため、常勤の事務職員と資料調査・整理職員の配置の必要性、資料整理のためのアルバイトを複数必要とすることを説いた。専門職としての資料調査・整理職員は、学芸員資格を有する3～5年任期の助手等を配置するのも一方策であるとした。また、膨大な資料整理やデータベース化は、学芸員課程の履修学生や卒業生をアルバイトとして雇用し、事務室の専任職員の指示により進めることが重要であるとした。



写真6

編さん事務室は、博物館実習室等が置かれている其中館（写真5）4階の5室（教員研究室として使用されていた諸室）を整備して開設することとなっ

た。3月中に各部屋の改装や事務用品・機器類の搬入、プレートの設置等を終え、2018年4月1日に形式的ではあるが総務部学園史編さん室（以下「編さん室」）が開設された。401室を事務室（写真6）、402・403室を作業室（写真7）、404・405室を収蔵スペース（写真8）とした。当初から、編さん室に専任の固有職員を配置すべく人事部門と交渉してきたが、実現が困難であることから、委託職員を配置する形で暫定的に編さん事業はスタートした。委託に当たっては、前年度から年史の編さんや資料整理を専門とする6社のヒアリングを実施し、最終的に（株）出版文化社と学園史資料整理について委託契約することとなった。



写真7

(2) 編さん室の業務

2018年4月26日に、出版文化社と2万点の学園史資料を整理することを業務として委託契約を締結し、5月2日から委託職員により資料整理の実務を開始した。編さん室に常駐する委託職員には、本学卒業生で学芸員有資格者の谷部文香氏が着任した。組織上、編さん室が設置されたものの、現在に至り、室長等専任職員の配置がないままの状態で作業は継続されている。



写真8

編さん室でまず取り組んだのは、①学園各課から編さん室への学園史関連資料の移管・集約化、②資料保存のための清掃作業・中性紙封筒詰め・中性紙保存箱での整理保管、③詳細目録の作成とデータベース化作業であった。学園では、2018年7月からペーパーレス化の作業が進められ、ギリギリのところ学園内に残る公文書を収集する機会を得ることとなった。幸い、編さん室が設置されたことによって資料も集めやすくなり、7月から精力的に資料収集を開始し、広報課、教職センター、大学院事務室、総務部、経営企画室、法人本部、施設管理部のほか、個人からも資料の寄贈を受けることができた。資料整理には、博物館学芸員で学ぶ学生をアルバイトとして10名以上を動員し、初年度は目標を超える24,558点の資料を整理し、目録化することができた。

2019年度も引き続き、出版文化社と資料整理について1万点の資料整理を目標として再委託契約し、5月1日から作業を開始した。資料収集も引き続き進め、短大資料をはじめ、施設管理部、スポーツ推進センター、幼稚園からも資料を受け入れることができた。人事交渉も引き続き進め、派遣職員という形になったが、後藤総務部長（当時）のご尽力もあり、ようやく2019年10月1日付で事務担当職員1名を確保することができ、矢口智子氏が着任した。以後、編集委員会の開催に関わる事務等が、編さん室が自ら行えるようになった。こうしたこともあって、2年次目の資料整理も、目標を大きく超える32,903点を整理し、目録化することができた。

2020年度からは編さん室が所管替えされ、4月1日付で総務部からIRアーカイブセンターへと移管された。同時に、引き続いて後藤氏の尽力により、派遣職員という形ながら、ようやく資料整理や調査を担当する専門職員として、谷部文香氏と大江晃世氏の2名を配置することができた。谷部氏は3月まで、出版文化社の委託職員として勤務していたが、4月から所属を

変えて(株)ナルドの派遣職員として着任してもらった。大江氏は、2019年3月まで本学芸術文化学群で助手として勤務されており、いずれも本学に所縁のある職員を配置することができた。しかしながら、2月からのコロナ禍、とくに4月8日に緊急事態宣言が発出されたことにより、学園事務のテレワーク化が進められ、直接資料を取り扱う整理作業や資料調査の遅れが目立つようになった。また、大学の授業もリモート化が進められ、春学期は学生の学内入構が禁止されたため、資料整理のための学生アルバイトの雇用ができなくなったことから、資料整理作業を中断せざるを得ない状況となり、編さん業務に大きな支障をきたした。それでも、2020年12月までに整理し目録化を終えることができた資料は、博物館学芸員課程で整理を進めてきた資料と合わせて、10万点にあと一歩に迫る99,300点となった。

また2020年度は、いくつかの委託業務を予算計上していたが、コロナ禍により作業が遅れ、10月1日に出版文化社とアーカイブ・コンサルティング契約をようやく締結するに至った。さらに2021年1月には、貴重資料のデジタルデータ化委託契約を締結し、約15,000コマの文書・写真資料のデジタルデータ化作業を進めている。図録編作成のための編集・印刷製本委託契約も準備を進めているが、コロナ禍の影響を受けて原稿執筆の遅れが目立ち、2021年1月現在ではまだ契約ができていない状況である。また本年度からは、紀要と年報を兼ねた雑誌『学園史研究』を刊行することとした。

4 学園史編集委員会と編さん計画

(1) 学園史編集委員会の設置と活動

2018年の編さん室の立ち上げ後、学園史の刊行に向け、実際の執筆者等による編集組織として「学園史編集委員会」（以下「編集委員会」）の立ち上げも進めた。委員には、安三プロジェクトのメンバーである、樽松かほる、清水賢一、太田哲男、中生勝美、李恩民、石渡尊子の各氏と筆者のほか、教育史や歴史を専門とする田中暁龍、金子淳、高瀬幸恵の各氏を加えたOGを含む学内教員10名と、中高・幼稚園の各設置校の代表として志村望、高橋賢一、向井里江の各氏、図書館・総務・広報関係事務部門の代表として坐間礼子、後藤彰寛、石岡正剛、芹野浩三の各氏の計17名をお願いした。その後、退職や異動等に伴い、一部委員の入れ替えが行われている。

第1回委員会は2018年7月30日に学園会議室で開催し、その後2～3か月に一度のペースで開催している。初年度は、まず学園史編さんの基本方針の検討を進めた。2年目の2019年からは、第1巻目として刊行する図録編の方針と項目案についての検討を行い、2020年からは執筆作業へと進んだ。しかし、3年目に入った2020年度は、コロナ禍の影響を受け3月から9月までの半年余りの期間、委員会の開催を中断せざるを得ない結果となった。この間、各執筆担当者による調査の進展も難しくなり、執筆も遅れる結果となった。委員会は2021年10月に再開し、12月までに10回の委員会を開催している。各回の議事内容は、表1のとおりである。

表1 学園史編集委員会の開催

回数	開催日	内容
第1回	2018年7月30日	1 各委員自己紹介／2 学園史編さん室設置の経緯／ 3 編集委員会の役割／4 刊行計画と学園史の内容
第2回	2018年9月25日	1 ペーパーレス化に伴う資料収集／ 2 これまでの学園史関連刊行物／3 学園史編さん方針／ 4 図録編・資料編項目案の検討

第3回	2018年12月5日	1 2019年度予算計画／2 学園史編さん方針の確認／ 3 学園史編さん室所蔵関連刊行物／4 図録編項目案検討
第4回	2019年3月14日	1 2018年度資料整理成果／2 2019年度予算と事業計画／ 3 写真資料の現況とデータベース化／ 4 図録編項目案検討
第5回	2019年5月5日	1 2019年度の資料整理予定／2 収集写真資料の現況／ 3 図録編項目案検討
第6回	2019年8月2日	1 今年度後半の編さん事業／2 今年度の資料整理作業／ 3 図録編項目案検討
第7回	2019年11月7日	1 常務理事会（10/28）への報告事項について／ 2 来年度の予算・組織／3 図録編項目案検討
第8回	2020年1月29日	1 2020年度予算計画／2 整理資料の目録データ／ 3 図録編作成仕様の検討／4 図録編項目検討
第9回	2020年10月27日	1 学園史編さんの新体制／2 2020年度の委託事業／ 3 図録編の検討／4 2021年度の要求予算／ 5 『学園史研究』の刊行について
第10回	2020年12月23日	1 2021年度の事業と予算／2 2020年度の委託事業／ 3 図録編の検討／4 『学園史研究』創刊号について

(2) 学園史の編さん方針と内容

編集委員会において、『学園史』編さん基本方針としては、次の6項目を掲げることとなった。

- ① 桜美林学園の前身である1921年の崇貞学園創立から現在までを対象とする。
- ② キリスト教主義に基づく国際人の育成を目指す学園理念を踏まえて記述する。
- ③ 学園本部の歴史と各設置校の歴史の両面から編さんする。
- ④ 教職員のみならず、学生・生徒・園児の活動記録にも配慮する。
- ⑤ 写真・図版資料を中心とする図録編、文字資料を中心とする資料編を踏まえて、資料を踏まえた通史編の3巻構成とする。
- ⑥ 聞き取り調査や回想録を含めた史資料に基づき、公正・中立かつ客観的・学術的に記述する。

また、『学園史』全3巻の構成と刊行計画は、次のようなもととしている。第1巻は「図録編」として、写真と図版を主とする資料集（記念誌ともなり得るもの）とし、A4カラー判、200ページ程度で2021年5月刊行を目指す。第2巻は「資料編」として、学園の歴史的文書等を掲載（通史を作成する基礎資料となる）し、A4判、p400程度で2024年頃の刊行を目指す。第3巻は「通史編」とし、学園100年の歴史を時代別・設置校別等に記述（学園初の通史となる）し、A4判、p400程度で創立105周年を迎える2026年頃の刊行を目指す。内容としては、崇貞学園時代、桜美林学園の設立と運営、中高の設置と運営、大学の設置と運営、幼稚園の設置と運営などを計画している。

全巻を通じて扱う項目としては、崇貞学園時代を前史として、桜美林学園の展開を中心

に据え、高等女学校に始まる中学・高校・幼稚園・大学・大学院の各設置校史、さらには事務局史の記述展開を計画しており、大まかな項目は、表2のとおりである。

表2 学園史の内容区分

分類	内容
前史	学園創立者 清水安三・郁子・美穂、崇貞学園（1921年創立） 崇貞女子工読学校・崇貞小学校・崇貞女学校・崇貞女子中学・ 崇貞日本女子中学
各設置校史	桜美林高等女学校（1946年設置）、桜美林中学校（1947年設置）、 桜美林高等学校（1948年設置）、桜美林幼稚園（1967年設置）
大学史	桜美林短期大学（1950年設置） 桜美林大学（1966年設置） 文学部・経済学部・経営政策学部・国際学部、 総合（芸術）文化学群・ビジネスマネジメント学群・健康福祉学群・ リベラルアーツ学群・グローバル・コミュニケーション学群・ 航空・マネジメント学群、図書館・研究所・学生団体 桜美林大学大学院（1993年設置）
事務局史	経営・施設・人事

5 おわりに

1970年代後半から学園史編さんの必要性は認められてきたものの、なかなか事業の実現には至らなかった。このたびの100周年を記念した学園史編さん事業は、40年越しに実現したものと言え、かつ、この機を逃したら、今後、学園史をまとめることはさらに困難を極めるものとなる。しかし、100年間の学園の歴史をここで一気にまとめるという作業は至難の業である。今に立てば、30年史、50年史、70年史という形でまとめがされていたならば、どんなに楽であったかと思う次第である。

学園史の編さん事業は3年目を迎えるが、全体から見るとスタートラインに立ったばかりである。今後、編集委員会や編さん室として行わなければならない業務は膨大にある。執筆者となる編集委員は、これまでに集め整理された10万点に及ぶ資料を丹念に当たり、資料の調査・研究に基づいた学園史を執筆しなければならない。事務局となる編さん室は、原稿執筆の進捗管理と原稿の回収・催促、写真や資料を利用するに当たっての著作権・肖像権等の権利者への使用手続き、さらに本という形にするために、編集・印刷製本業者への委託内容の検討や委託先の選定、そして校正をはじめとする業者と執筆者とのやり取りなども行わなければならない。

また、これらの作業と並行して、将来に向けての学園史資料の保存・管理や、デジタルアーカイブ化も図る必要がある。編さん作業とともに、アーカイブスセンターや学園博物館の設置も急がなければならない課題である。次の100年に繋げるべく、記録資料としての学園史編さんに心掛けたい。

注

- 1) 2017年5月11日「常務理事会」資料による。
- 2) 2017年度第1～8回「学園創立100周年実行委員会」記録メモによる。
- 3) 『崇貞・桜美林の教育』桜美林大学清水安三記念プロジェクト、2007年。
- 4) 以下、本章の記述は、拙稿「『桜美林資料展示室』の準備と開設について」『清水安三・郁子研究』創刊号、桜美林大学清水安三記念プロジェクト、2009年によるところが大きい。
- 5) 当時は、町田に桜美林学園が開かれた1946年を創立年としていた。
- 6) 詳細は、拙稿「学生と手がけた記念展－博物館実習「みんなでつくる60周年記念展」から－」『博物館学芸員課程年報』第8号、桜美林大学、2007年参照。
- 7) 3) に同じ。本書「第二部」参照。